様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５月１７日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００８～２０１０
課題番号：２０５３０１６８
研究課題名（和文）十七世紀英国共和主義思想と宗教性―ジェームス・ハリントンを中心に―

研究課題名（英文）Republican religiosity with special reference to James Harrington

研究代表者
竹澤　祐丈（TAKEZAWA HIROYUKI）
京都大学・経済学研究科・准教授
研究者番号：６０３６２５７１

研究成果の概要（和文）：
本研究は、17 世紀英国共和主義思想の宗教性について、同時代の宗教思想の概観と分析しつつ、ジェームス・ハリントンの主著 *The Commonwealth of Oceana* (London, 1656) だけでなく、第二の主著とも呼ばれる *The Prerogative of Popular Government* (London, 1658) をも考察の対象とした。その結果、通説が強調するような統治機構に表現される宗教性（エラストゥス主義的な教会統治論など）だけでなく、歴史認識や社会認識などに関する議論にも、ハリントンに特徴的な宗教性を見出せることを明らかにした。すなわちその宗教性とは、端的に言えば、狭義の信仰や教義理解というよりは、むしろ人間社会に関する道徳哲学と呼びうるものであった。

研究成果の概要（英文）：
This research intended to analyse a republican religiosity which James Harrington, a major republican theorist in 17th century England, held both consciously and unconsciously. The result indicates that his religiosity is not captured only in his idea of ecclesiastical polity as the existing literatures have emphasised so far, but also in his historical understanding of human being, of divinity, and of society. Thus, the religiosity of Harrington should rather be labelled as moral philosophy, a systematic understanding of human nature and human society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会思想史
科研費の分科・細目：経済学説・経済思想
キーワード：ハリントン、共和主義思想、宗教思想、マーチャモント・ニーダム、社会思想史、西洋史

１．研究開始当初の背景

(1)　申請者はこれまで、アダム･スミスの社会科学体系における共和主義的要素の検討を長期的課題として念頭に置きながら、ジェームス･ハリントンの思想的性格を明らかにする研究を遂行してきた。それは、以下の状況判断による。17 世紀イングランド共和主義思想がスミスを含むスコットランド啓蒙思想に多大な影響を及ぼしたことは、J.G.A. Pocock, *The Machiavellian Moment* (Princeton, 1975)や M. Ignatieff & I. Hont eds., *Wealth & Virtue* (Cambridge, 1983)、田中秀夫『共和主義と啓蒙』ミネルヴァ書房、1998 年、などにより通説になりつつある。しかしその影響の程度と様相に関しては、議論が分かれている。

(2)　議論が分かれる理由は主として三つある。第一に、自然法思想研究の蓄積に比べて、共和主義思想自体の解明が不十分、第二に、これら二つの思想潮流の融合の様相に関する研究が不十分、そして第三に、17-18 世紀後半の期間の共和主義思想の動態変化の把握が不十分だからである。

　よってこれまで申請者は、第二と第三の研究の前提となる第一の側面に焦点を絞り分析を進めてきた。

(3)　特に、本課題の申請の直前には、ハリントンと同時代共和主義者との比較分析による、17 世紀英国共和主義思想の多様性と統一性とを相即的に論ずるためのベンチ･マークの確定に専念してきた（平成 16-17 年度及び平成 18-19 年度の２件の若手研究（B)）。

(4)　これらの研究によって得られた知見は、以下の三点である。第一に、17 世紀英国共和主義思想には、統治機構論的要素と道徳哲学的要素とが並存すること、第二に、機構論的共和主義者とされてきたハリントンにすら、この並存が看取できること、第三に、この並存を共通項（統一性）として、上記の二要素の比重の相違を、英国共和主義の多様性として把握可能であることである。以上の知見から、この並存の分離過程の延長線上に 18 世紀後半の共和主義思想と経済学成立の関係を位置づけることができるのではないかという仮説を得られた。

２．研究の目的

本研究は、上記の仮説、すなわち統治機構論的要素と道徳哲学的要素の並存状況の変化から経済学の成立問題を把握する可能性を追求し、かつ、17 世紀から 18 世紀後半にかけての共和主義思想の動態変化の把握をおこなうために、研究史上ほとんど手付かずのテーマである、17 世紀共和主義思想そのものが持つ宗教性の解明を、ハリントンの著作を中心におこなう。つまり、17 世紀共和主義思想が有した宗教性（特定の教義ではなく社会や人間に関する宗教的価値規範）がいかにして 18 世紀的な道徳哲学に変貌していったのかを、その原点であるハリントンの宗教性を分析することで展望することである。

３．研究の方法

(1)　概要

本研究は、３ヵ年という期間に、主として文献研究によって、従来のハリントンの世俗性研究との接合を意識しつつ、その特異な宗教性の分析をおこなう。

　その際に以下の五点に留意する。第一に、従来のハリントン研究が集中して分析してきた主著『オシアナ共和国』だけでなく第二の主要著作である *The prerogative of popular government* 1658 をも議論の対象とすること、第二に、西洋史や宗教思想史の良質な知見を十分に参照すること、第三に、同時代の宗教思想的な広がりの中でハリントンの議論を把握すること、第四に、電子データ・ベースを効果的に利用すること、そして第五に、内外の関連分野の研究者との意見交換を緊密におこなうことである。

(2)　研究第一年度におこなった具体的作業

研究の初年度である 20 年度は、次の三つの作業をおこなった。

　第一に、従来のハリントン研究においてその宗教性に関する議論がどのようにおこなわれてきたのかを網羅的に把握した。これは、（本計画を立案する際にもサーベイを行っているが）改めて研究史を振り返ることにより、論ずべきテーマを確実に把握するためである。

　第二に、ハリントンの諸著作を再度読了することによって、著作間の関係や、本研究で集中的に分析する『オシアナ共和国』と *The prerogative of popular government* 1658 の議論の概要を今一度把握した。

　第三に、W.K. Jordan、山田園子、B. Worden、C.J. Sommerville、J. Salmon などの定評のある 17 世紀英国・欧州宗教思想研究・聖書史研究を可能な限り網羅的に精査することにより、同時代の宗教的議論の広がりにおいてのハリントンの大まかな位置に関する見通しを得た。

　以上に関連して、関連文献や資料の購入・収集をおこなうと同時に、内外の 17 世紀思想史研究者との意見交換、ケンブリッジ大学図書館を中心に資料収集と電子的データ・ベ

ースの利用などをおこなった。

(3)　研究第二年度におこなった具体的作業
研究第二年度である 21 年度は、第一年度での論点の確定と宗教思想の布置関係を踏まえて、『オシアナ共和国』と *The Prerogative of popular government*、とりわけその book II、を精読し、ハリントンの神観、人間と神の関係、聖書理解とそれがもつ聖書史上の意味などを分析することによって、世俗的と言い習わされてきたハリントンの宗教性の基本的性格を把握・分析した。

(4)　研究第三年度におこなった具体的作業
研究の最終年度である 22 年度は、引き続きハリントンの宗教性分析をおこなうとともにこれまでの分析結果を取りまとめ、それを踏まえて、ハリントンの思想において宗教性と世俗的政治論とがどのような関係にあるのかを、再度、定式化することに努めた。

４．研究成果
(1)　概要
本研究は、成立期経済学と共和主義の関係をより明確にする長期的課題を念頭に、17 世紀から 18 世紀後半にかけての共和主義思想自体の動態変化の把握の基礎として、17 世紀共和主義思想が持つ宗教性の諸相を、ハリントンを中心に解明することであった。

(2)　研究第一年度の研究成果
上記の目的に従って、研究の初年度である 20 年度は、次の三つを課題とした。第一に、従来のハリントン研究においてその宗教性に関する議論の論点に関する網羅的把握であった。この作業はほぼ終えつつあるが、若干の調査を残しているので、次年度も継続したい。
　第二に、ハリントンの諸著作を再度読了して、著作間の関係や、本研究で集中的に分析する『オシアナ共和国』と *The prerogative of popular government* の議論の概要を今一度把握した。この作業によって、ハリントンの著作における宗教性の表明の基本構造が、穏健な国教会維持派の思想に近いことが再確認された。またハリントンの宗教性の特徴を、より明瞭に把握するために、同時代の共和主義思想家であり、かつ、無神論的思想の持ち主とされているマーチャモント・ニーダムの徳論の特徴を分析し、口頭で発表した。
　第三に、関連文献や資料の購入は順調におこなうことが出来たが、英国ケンブリッジ大学図書館を中心とする英国での資料調査や英国の関連研修者との意見交換は、校務の関係でおこなうことが出来なかった。これは研究第二年度である次年度におこなうよう準備を進めている。国内研究者との意見交換は、各種学会の機会を捉えて、ほぼ予定したものを全て遂行した。

(3)　研究第二年度の研究成果
平成 21 年度は、次の四つを課題として設定したが、それらをほぼ達成することができた。
　第一に、ハリントンの宗教性に関する先行研究の再調査を継続しておこない、ハリントンの宗教性をめぐる論点を、確定することを課題とした。この成果は未発表であるが、概略として、ハリントンの宗教性は、セルデン＝グロティウスの宗教理解とほぼ同様の議論をおこなっていることが確認された。この結論は、2009 年 12 月の口頭発表に部分的に反映された。
　第二に、『オシアナ共和国』と『民衆政府の卓越性』とりわけ、その book II、を精読し、ハリントンの神観、人間と神の関係、聖書理解とそれがもつ聖書史上の意味を分析することによって、ハリントンの宗教性の基本的性格の把握を課題とした。この成果は、12 月に口頭発表された。
　第三に、英国での資料収集と国内外の関連研究者との意見交換を進めることを課題とした。７月開催の Republican Exchanges (University of New Castle, UK) に参加し、ペルトーネン教授（ヘルシンキ大学）などを中心に、共和主義思想の概念規定や宗教性をめぐり、また、10 月開催の Political Thought & Social Conflict in the Dutch context of war & maritime competition 1590-1750 (Rotterdam University, The Netherlands) にも参加し、オランダ共和主義との比較をめぐり、非常に有益な意見交換を行なった。さらに政治思想学会、日本西洋史学会、日本中世学会、日本イギリス哲学会などへの参加と意見交換をおこなうことができた。
　第四に、前年度の研究成果の一部の論文化を課題としたが、「マーチャモント･ニーダムの共和政論の決疑論的性格」として公刊された。

(4)　研究第三年度の研究成果
研究の第三年度であり、最終年度でもある平成 22 年度は、次の五つを課題とした。
　第一に、前年度に日本イギリス哲学会関西部会（2009 年 12 月）で口頭発表した *The Prerogative of Popular Government*, book II の分析の一部を元に、2010 年 5 月の政治思想史学会でのシンポジウムで発表をおこなった。この作業によって、共和主義思想史における宗教性の議論の役割について、さらに検討する論点を明確化した。
　第二に、前記の二つの口頭発表とそこでの質疑応答を踏まえて、その内容の一部を、「近世英国共和主義思想における社会と国家」と

して論文として発表した。
　第三に、ハリントンの宗教思想を経済思想と関連付けて議論をおこない、関連学会において口頭発表をおこなうという課題については、十分な時間を割くことができなかったので、今後の課題となった。
　第四に、ハリントンが思想を形成する際に影響を及ぼした初期ステュアート朝期の宗教思想とその論点を踏まえて、彼自身の家族史的背景が宗教思想に与えた影響について考察を加えた。ハリントンの親族たちは、ほぼ国教会穏健派と呼びうる思想傾向をもつことが確認できた。
　第五に、英国やオランダでの資料収集と、欧州の関連研究者との意見交換を進めつつ、研究の総括をおこなった。8 月開催の 21st INTERNATIONAL CONGRESS OF HISTORICAL SCIENCES (University of Amsterdam, The Netherlands)、ならびに、10 月開催の 2nd International Conference on the History of the Humanities (University of Amsterdam, The Netherlands) にも参加し、17 世紀オランダ共和主義思想における宗教性について、大変有益な意見交換を行なった。さらにこれらのカンファレンス参加期間には、アムステルダム大学図書館や、歴史博物館などにおいて共和主義思想に関する資料収集などもおこなった。さらに政治思想学会などへの参加と意見交換を行なった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①竹澤祐丈、「近世英国共和主義思想における社会と国家―平和と穏やかさという福祉の実現をめぐって―」、『政治思想研究』（政治思想学会）、査読なし（招待論文）、第 11 号、2011 年、55-87 ページ。

②竹澤祐丈、「マーチャモント･ニーダムの共和政論の決疑論的性格」、『経済論叢』（京都大学経済学会）、第 182 巻第 5・6 号、査読なし、2010 年、1-31 ページ。

〔学会発表〕（計３件）
①竹澤祐丈、「シンポジウムⅢ　近世英国共和主義思想における国家と社会」、政治思想学会、2010 年 5 月 23 日、東京大学本郷キャンパス。

②竹澤祐丈、「英国共和主義思想と宗教性―J・ハリントンを事例に―」、日本イギリス哲学会関西部会例会、2009 年 12 月 5 日、キャンパスプラザ京都。

③竹澤祐丈、「共和主義思想における徳論―マーチャモント・ニーダムを中心に―」、日本イギリス哲学会関西部会例会、2008 年 7 月 5 日、京都大学経済学研究科。

６．研究組織
(1)研究代表者
竹澤　祐丈（TAKEZAWA　HIROYUKI）
京都大学・経済学研究科・准教授
研究者番号：６０３６２５７１

(2)研究分担者
該当なし

(3)連携研究者
該当なし